

大宮町二代目町長
松井端(下)

◇台湾での活動

台湾総督府の事務官となった松井端は、職務の傍ら精力的に作詩活動に励みました。三十年に及ぶ漢詩家としての活動で、台湾の文壇でもその存在を認められるようになっていきます。

松井家には端の漢詩が掲載された新聞の切り抜きを貼り付けたスクラップブックが存在し、今も大切に保管されています。それぞれの漢詩には、いつ、どんな事柄に対して詠んだものなのかを表す表題が付けられています。

これを見ると、割譲後の台湾を平定した英雄として尊崇されていた北白川宮能久親王を称える詩(北白川宮は台湾平定直前の一八九五年十月に台南で死去、皇族で初の外地殉職者)や台湾神社(一九〇一年に日本が作った台湾総鎮守。北白川宮ほか三神を祭神とする。宮の死去の日が祭日)の祭礼に際しての感想、明治天皇五年祭(没後五年、一九一五年か)に際しての詩、漢詩仲間との交



▲端と友人2人の漢詩

友の中で詠んだものなどの記述があります。

台湾の漢詩界では日本人も活躍していました。右の掛け軸は端及び二人の友人の漢詩を一つの掛け軸にしたもので、中央が端(号松軒)の漢詩です。草山(台北近郊の景勝地)に遊ぶ光景を詠んでいます。端は長沼樞仙、小野田三徑と親交があったようです。

日本領となった台湾には多くの日本人が移住し、県人会も発足します。端は茨城県人会にしばしば参加し、その度に漢詩を詠んでいます。茨城県人会が開かれるのは決まって「北投神泉閣」でした。北投はラジウム泉で有名な台湾有数の温泉地。日本が一九九五年に台湾を割譲すると、翌年には北投温泉に日本人が温泉宿を開業しています。

折笠村(現日立市)出身で憲政会に所属した衆議院議員の天津淳一郎(号鈴山)の台湾視察の際には、茨城県人会が歓迎会を開催しています。新聞には、その時に大津と端が

互いに詠んだ漢詩が掲載されました。昭和二年七月十五日、端は日本へ帰還することになり、七月十三日付の現地の新聞に「松井端(漢詩人)訂十五日蓬莱丸帰還内地」と掲載されます。端は台湾ではすっかり「漢詩人」として認識されていたのです。

◇寄贈された松井端遺品

昨年夏、端の孫にあたる松井暢夫さんから、端の遺品が寄贈されました。前号で紹介した、功労についての感謝状と副賞の木製火鉢のほか、前述のような直筆の掛け軸や色紙、台湾時代に愛用していた文机、陶製火鉢、そして五百冊以上の蔵書と文箱などです。蔵書のほとんどは漢詩に関するもので、台湾で購入されたと思われる。それに混じって、「油籘篇」(水戸藩士会沢正志斎が野口時雍館のテキストとして編さんした水戸学の教本)など、水戸藩にかかわるものも確認されました。

端は帰郷の三年後、水戸市新荘に家を新築し、ここで台湾から持ってきた調度品に囲まれて漢詩を作り続

け、余生を送りました。端の墓は水戸藩士の通例に倣い、常磐共有墓地の一角にあります。



▲松井端の墓



▲文机



▲端の孫の松井暢夫夫妻

※松井暢夫「松井端はどんな人」(私家版)二〇一二を参考にしました。松井暢夫「友人との交流の中で詠んだ漢詩」は『大宮郷土研究』第十六号に掲載されます。

【前回のふるさと見て歩きに誤りがありました。】
・四段目の四行目
誤台湾総監督府→正台湾総督府
お詫びして訂正します。

歴史民俗資料館大宮館
52-11450